

ハンドボール競技におけるテクニカルスタッフの活動に関する事例研究

日比 敦史 (201211963、ハンドボールコーチング論)

指導教員：會田 宏、藤本 元、山田 永子

キーワード：スカウティング、スポーツコード、情報戦略

【目的】

JOCは「JOC GOLD PLAN」の中で、テクニカルスタッフの活動が高度なコーチングを可能にするとしている。公益財団法人日本ハンドボール協会は、競技力向上のために、ゲーム分析やテクニカル分析などを行うアナリストの養成に努めることを掲げている。しかし、ハンドボール競技におけるテクニカルスタッフの活動に関して明確な指針はない。本研究では大学ハンドボールチームにおけるテクニカルスタッフの活動内容を事例的に分析し、その活動を明示することを目的とした。

【方法】

本研究の対象は筑波大学男子ハンドボール部情報分析局(テクニカルスタッフチーム)が2015年3月から9月までの約7か月間に行った活動である。分析の基礎資料は①情報分析局リーダー(以下リーダー)によるフィールドノート、②監督、部長、リーダーなどによるミーティングでの発言内容、③情報分析局内におけるミーティングでの発言内容である。基礎資料をもとに(1)スカウティングに関する情報収集・分析の方法、(2)分析資料および映像の提示方法、(3)情報分析局における組織としての充実の3つの観点から活動内容を記述・評価し、考察した。また情報分析局の活動内容について選手の視点から評価するために、秋リーグ終了後(10月)に33名の部員を対象に5件法によるアンケート調査を行った。得られた結果をポジション別、出場頻度別に比較検討するために、一元配置の分散分析を行った。

【結果と考察】

(1)スカウティングに関する情報収集・分析の方法

2015年の改善として、スポーツコード(PCを用いたゲーム分析ソフト)におけるコード表の改良と、新しいビデオカメラの導入を行った。その結果、「要求したもの(映像)で見られなかったものはなかった」(監督)、「分析する人たちの大きな時間の短縮につながった」(部長)という評価を得た。これは、2014年に比べてコード表における分類項目が増えたが分析者の負担は変わらなかったこと、ビデオカメラがスポーツコードに直接取り込める形式(mp4)で撮影できるものに替わったことによるものと考えられる。

(2)分析資料および映像の提示方法

2015年の改善として、共用のパソコンを用いたスカウティング映像の配布(4月)、ハーフタイムにおける試合前半の映像とゲーム分析結果の提供、YouTubeを活用した練習・試合とスカウティング映像の共有(7月)、ランニングスコアの電子化を行った。その結果、「(YouTubeを使うことで)ミーティングの時間が非常に短くなった。効率がいい」(監督)、「パソコンでランニングスコアをつけることでゲームを客観的に見ることができていた」(監督)という評価を得た。これは、2014年に比べてミーティング前に選手たちがスカウティング映像を見るようになったこと、試合のハーフタイムに前半のデータが集計された状態で見られるようになったことによるものと考えられる。

(3)情報分析局における組織としての充実

2015年に、情報分析局の発足、役割の明確化、仕事の分担に関する見直しを行った。春は、「監督との連携が不足していた」(リーダー)ことや、「局員に仕事を割り振ることがうまくできなかった」(リーダー)ことが問題点として明らかになった。秋は、「春より(監督との)連携が取れる」(リーダー)ようになった。また、「分析(情報分析局)に専門のシステムエンジニアのような人をつけてアドバイスがもらえるといい」(監督)という意見も出た。「熟達した人がもう2、3人必要」(部長)という指摘からも、今後、情報工学系を専門とする人物の採用を検討していくことが、さらなる組織としての充実につながると考えられる。

(4)選手の視点からの評価

テクニカルスタッフの活動を評価するいずれの質問項目においても肯定的な回答の割合が高かった。ポジション間、出場頻度間に有意な差は認められなかった。これらのことから、いずれの部員から見てもテクニカルスタッフの活動がチームに貢献したことがうかがえた。

【まとめ】

本研究の事例から2015年に行われた筑波大学男子ハンドボール部における情報分析局の活動は高度なコーチングを可能にするものであり、特にインターネットを用いた情報提供が有効であることを示唆している。